ヲ快クシテ後出家スルモ遲カラジト爲シテ還リ家ニ向フ佛ソノ道果ヲ得ベキヲ鑒知シ一ノ容姿絶世ノ女人ヲ化作シ共ニ城ニ復ル化人途ニ蓮華ノ膝ヲ枕ニシテ睡臥ス忽焉トシテ命終シ膿脹臭爛シ腹潰工蟲出テ遂ニ肌體解散ス蓮華見テ驚怖シ佛所ニ到リ自ラ之ヲ白ス佛爲ニ法ヲ說キ阿羅漢ヲ得セシム」文合掌所引の法句經註には出家後半月にて四眞諦を證し或る夜布陰堂に入り燈火を見てそれを緣境として火遍處を修し阿羅漢果を證せりと

西域記卷四「佛忉利天ヨリ下降シ玉フ時蓮華色比丘尼化シテ轉輪王トナリ七寶導縱シ四兵警衛シ佛所ニ至リテ比丘尼ニ復シ初メテ世尊ヲ見タルヲ悅フ佛告テ曰ク汝ハ初見ニ非ズ須菩提既ニ慧眼ヲ以テ我ヲ見ルト」文佛陀の双神變は外道降伏の爲であつた。

大智度論一四十三「華色比丘尼呵之復以拳打尼尼即時眼出而死」(文明三逆罪下)

谷響統四初「經律異相ノ蓮華色尼發心得道ノ緣等ヲ出セル事アリ提婆所殺ノ蓮華色ト同異未詳又佛忉利天ヨリ降リ玉フ時輪王ト化シテ最前ニ佛ヲ拌セシ華色比丘尼モコレト同異測リカタシ經律異相ニハ又別に華蓮姪女ノ事ヲ出セリ」云云外に記八本五三輔正記八二十涅槃會疏三一十等ニ出ヅ

美しい名の蓮華比丘尼は恐ろしい達多の爲に悲慘の死を遂げた考へると當時の敎團の人々と吾等の間には切つても切れぬ人間性の結ばれて居る事が悟られる女性の世界を男子のそれの如くに展開せんとするときは優秀なる創造力に俟たねばならぬ若し此等婦人の事蹟を明かにするを得ば佛敎史上婦人の如何に活動せしかを知るを得るものなるを以て之を記して後鑒を待つのみ成りしものは皆滅す不逸放に勤修せよ。

聖き涙

秦　觀　行

諸法實相鈔曰く現在の大難を思ひつゞくるにも涙、未來の成佛を思ふて喜ぶにも涙せきあえず、

鳥と蟲とはなけども涙落す、日蓮はなかねども涙ひまなし世間の事にはあらず唯偏に法華經の故也若しからば甘露の涙とも云ひつべし。

涙と云ふものは其の人の眞情發露の結果であるから概して神聖で、なんとなく其の人の美しい情が偲ばれるものである、私共が心に非常に嬉しいとか、または非常に悲しみを感じた時には、其の悲嬉の程度は、語葉や身体では現はすことが出來ない此の時に當て一滴の涙は、良く其の情を表してくれるものである。然らば、聖祖は「うれしきにも涙、かなしきにも涙、涙は善惡に通ずるものなり」と言はれてゐる。私共の生涯の中には、自分の周圍の事狀からして隨分潸々と泣くこともあらうが、多くは自己が其の中心概念となつてゐるやうである、甚しいのに至つては、それ程悲しく感ぜなくても、多くの人が泣いてゐるから、自分丈平氣な顏もして居られず、世の所謂「おつきあいに泣く」といふ連中があるが、此等は全く穢れた涙、涙を惡用したものと云ふべきである。

未來の成佛を思ふて泣き、一切衆生の浮沈を慮りて泣く其の涙は實に神聖な、無垢な美しい涙である、古來から、偉人英雄が、其の國を思ひ、其の民を思ふて感慨無量、靜夜、拱手、天の一角を睨むで悲しむ、其の一滴の涙は千萬の意味と無量の價値とがある。

嗚呼本化大聖は、かうした涙に幾度咽ばれたであらうか、波荒き俎岩に佇み玉いては、澎湃たる大洋を眺めて、我等の成佛に就て慨き、朔北風寒き塚原の野に流されては、法華經の爲に悲しみ玉はれたのである。

生活難、就職難、或は俗事の悲痛暗愁に就ては誰れも直接間接の關係からして慨きもし、悲しみもするが、誰か妙典の流布を思ひ衆生の成不を思ふて慨いた人があらう?、私共少くとも宗教家の立場としては、生活といふ樣なことは第二義の問題である、現代の多くの僧侶が、此の第二義の問題に就てのみ、煩悶して、更に頭を衆生といふ方に向けなくなつて、淺間しひ穢れた涙に親むで、

聖き本化の涙に疎くなつたのは慨くべきである、宗教家の天職を忘れた大罪人である。

崇拜し奉る本化大聖の御一代は永へに此の迷雲を開拓して誤まれる、宗教家の手本である。

聖き涙、私共は此の尊い、聖い、意義ある涙に咽ぶやうであつて欲しい、そして一日も此の聖い涙が、王法と佛法と冥合し四海妙典に同歸して、遠くば本佛の御素懷、近くば本化大聖の大志が現實されて、上下萬民隨喜の涙となるやうにしたい

聖き涙の底には魔するやうな大なる力がある。

聖誕七百年に際して
世人に訴ふ

高瀬教闡

凡そ此の天地間に介在せる、ありとあらゆる生物には、病無き能はず、況して四百四病の器とも云はれて居る我我人間の身の上に就ては、言を待たざる所なれば、此の集團によりて構成されたる國家なるもの、又病無きを得ず。我々人間の病に就き考へ見んも、其病質によつて、普通一般の所謂病と稱するものと傳染性を有する病とに別れ、此の二者を比較し其病質の何れが恐ろしく何れが害毒の甚大なるかは云はずもがなにて、コレラ、ペスト、肺結核等の如き傳染病は他の病氣に比して如何に危險たるかは論を待たず、彼の病菌に一度襲はれんか終に致命傷たるを免がれず。胃腸心臓等の如き病も共に恐るべきは相違なきも其異なる點や、その人一人に止まれど、傳染病たるや、唯單に一個人を倒すに止まらず猛烈なる勢を以て四方に傳播し、其害たるや、實に戰慄すべきこと、流行性感冒の爲めに倒れたる數、前後五箇年間に亘る世界の大動亂に於ける戰死者（七百萬人と稱せらる）のそれよりも、僅かの短日月に於ける惡性流行感冒による死亡者の多きを算せしは、既に世人の知る所にして、殊に外國の或市の如き其人口の一割に及ばんとの慘憺たるに到つては、戰慄せざるを得ず。故に誰人も傳染病患者と云ふを